

九州方言の特異性（二）

吉町，義雄
九州帝國大學法文學部國文學研究室講師

<https://doi.org/10.15017/10584>

出版情報：九大國文學. 2, pp.53-86, 1931-10-05. 九大國文學研究會
バージョン：
権利関係：

九州方言の特異性(二)

吉 町 義 雄

九州方言の文學

此處に吾人の論題となるのは九州方言の特異性が日本の文學に於て僅かに出沒する片鱗の指摘であるから、勿論上方文學や江戸文學に對應す可き筑紫文學の結集でもなく東北文學の意圖と等しき西南文學の概觀でもないのである事は別に前置する必要はないが、只その出發點が近代日本語の開始期に置かれる理由は既に前諸項に由つて明らかであると思ふから今更めて贅言しない。

九州方言が近代日本文學に反映し出現する分量は、既に古代日本語に於ける時とは異り内地方言圏内では著しく特異性を消滅させて行く筈の本州東部、否東北部方言のそれに對比しても極めて僅少であつて、夙に安藤正次教授が「古代國語の研究」(大正十三年初版)で述べられる如く(三六―七頁)

平安朝以來の傳統的文學の勢力によつて保護された京都語系の文語が依然文學上の用語として高い地位を占めてゐたので、近畿語は常に全國の標準語として仰がれてゐたのである。京都語に對する九州語の地位も、かういふ

見方からいへば考慮に加へなければならぬのであるが、九州語は、由來關西語系に屬するものであり、かつまた、政治上に於ける九州の地位は、東國の京都に對する關係とは大に趣を異にしてゐたので、おのづから、九州語の勢力は京都に及ぶことは得なかつたのである。むしろ、九州語は京都語近畿語の勢力に支配されてゐたといつて

よ

のであるが、此の事は自分が特に本項に於てやがて最も焦點に近く置いて論じ度いと思ふ南蠻文學即ち吉利支丹文學上の九州方言要素有無問題に關しても、序説であり且又結論でもあるのである。九州方言の特異性なるものが近代日本語數百年間の生活に於て如何なる形態を構成しつゝあつたかと云ふ事を認識するには先づ何よりも、時代が僅か宛降るにつれて九州方言が漸次他の内地方言の近代的發達への步調に由つて取殘される結果或年代では内地方言全般の姿であつたものも何年か後の年代では主として九州方言のみに含有される古形をその儘其の特異性と見做し得可き事、従つて此の言語事實は換言すれば、或年代では其の特異性と目され得るものも何年前の年代では未だ内地方言全體の通有性であつて他の内地方言にも多分に存在する一般水準であるから、殊に現代の九州方言の特異性を無批判に過去の九州方言の尺度に用ゐようとする錯覺に陥らぬ様に戒心する必要があり、然る後に九州方言独自の色彩聲調を觀察享樂す可きである。是から逐次資料の展開を行ふ事としよう。

八幡大菩薩の旗を翻して千里の波濤を事ともせず明末南支那沿岸を荒掠した倭寇の九州方言の斷片が錄されて今日では絶好の資料たる「日本風土記」卷之四は前項に於て僅かながら見本を示したのであるが、卷之五所收の所謂山歌

(俗諺) 十數首の次にある「憶中華調」と題する拙劣な直譯體の琴譜(歌)一首に西國訛の混する事は夙に新村博士の

「南蠻記」(大正四年、絶版)や「續南蠻廣記」(大正十四年)所收の「倭寇時代の俗語」(大正元年十月、雜誌「心
の花」第十六卷第十號所載)で指摘されて居り、春日教授も前項屢々引用の講演パンフレットに於て一部分按讀を試ら
れて居るが、此の口語歌が萬曆年間の何時頃に物されたにせよ、或は萬曆を全く外れる程溯り又は假に降るにせよ、
文學作品として扱ふ限り其の頃の九州方言の特異性の程度を確證する上には曩の卷之四の語彙とは又異つた意味に於
て得安からざる資料なのであつて、その全部の讀解は永久に正鵠を思難いであらうにしても何人に由るも贊同される
可き明白なる語法は此の後で論ぜられる吉利支丹文學口語資料に並行連絡さす事實に重要な標準規矩となる筈で
あり、此の點自分は彼の萬葉の荒雄や吉志美岳の歌——何れも前項に舉示した——と同様慎重に考察される可き事を
主張しても強ち奇矯の言とは見られまいと思ふのである。十七世紀末葉長崎に舶載されたまゝ著者不詳の典籍に僅か
に残存して以後祿に顧る人もない此の純真なる生ける俗語の面影を此の機會に廣く傳へ且は讀者自身の按讀の興味を
喚起する爲に、前項に於けると同様、否より以上忠實に、煩を厭はず市村瓊次郎博士解題の例の珍書同好會本の儘を
左に轉寫する事にする。活字の點で困る字劃を正體に復す以外は、字體字配大小前後共全く同上本「坤」(卷)四八丁
裏半—九丁裏半の體裁を嚴密に守る事にしよう。下側二箇所括弧附の註は勿論自分の筆である。因に同上本の大字
は活字貳號大(本論文表題大)小字は參號大の楷書であるが、便宜上大字は四號、小字は五號(貳號の四分一)で組む事とする。

憶中華調

可意 那乃隔法乃兮可意那乃隔國尼許多木
濕安

九州方言の特異性

五五

那立空拿搖乞而水那氣搖兮義西一潔搖革

擊尼氣搖陽脉阿和密辞挨私步饒士密路明

哥多兮箇々路和慕兮木曹烏弥多委秃木路

那渾着路逆封屋之

釋音

可濕安意想那助語乃隔中法乃華尼助語

國尼國許多木那人物立空乃搖俊聰

乞之木那衣服氣搖兮齊整義西一潔

西湖搖革擊兮好景氣搖陽脉青山阿

和密辞綠水密路觀明哥多好看兮助語

箇箇路心和慕兮思木曹可惜烏弥海

多委遠秃木那那革搖另世界渾着路在逆封

日本屋之內裡互用

切意 想中華兮想中國兮人物聰俊衣冠整

(以下四九才)

(以下四九ウ)

齊西湖好景青山緣水遊嬉多趣觀之
出奇可惜海遠另一世界不在我日本
國裡

凡そ此の種の按讀に當つて數種の異本書寫を校勘するの不可缺たるは言ふ迄もないのであるがそれは他日誰人かの手に委ねるとして、此の卷に於て本文と釋音との相違は前者は大部分後者に由つて正されるのが普通であり、前後の關係や他の文例から推しても、

本文 第一行の兮と第三行の尼とは當然置き換へられる可き事は釋音の順序から想像され、第二行の而之も即ち之而之の方が穩當と考へられるが、其の下の水は勿論木である可きは餘りに分り切つてゐるとしてさて第四行の禿之木路之は釋音の禿木——遠那革搖は勿論多姿の釋音であるが——と孰れぞ哉と思はれはするけれども大體には矢張り他と同様に釋音に従ふの穩當なるを覺えるのである。

釋音 第一行の想や第七行の在が小字であらまほしい事などは言ふ迄も無い。

切意 第二行の縁が縁の誤である事も無論だ。

因に春日政治氏御所藏の寫本二種を検して見ても餘り珍書同好會本と差異は無く従つて大して參考にならなかつたが、序だから必要な所だけその異同を附記して置かう。一は彼の林春齋(愁)が長崎の牛込氏所藏の秘本を延寶五年(一六七七)二月廿八日巳刻(午前十時)から翌日未刻(午後二時)迄に塾生十八人をして約四百四十餘葉全部を摸寫させ畢つた

と云ふ跋文ある寫本即ち

延寶五年丁巳二月二十九日 弘文院林學士 圖

なる奥書のある寫本の寫し（五冊本、複寫者年月不詳）であつて、是に由れば本文第二行の水は木、第三行の尾は兮、切意第二行の縁は縁なる事の當然であるのが確められる以外何も新材料は見られない。今一つは表紙の一に「全浙日本風土記 全」とある右側に「中井學校藏書寫」とあり、表紙の三には

寛政八^丙辰年七月 杜 甚右衛門 藏

といふ奥書のある全部六十四丁の抄本（一冊）であつて、内容は「全浙兵制」三卷及び「日本風土記」五卷の目錄を掲げた次へ後者五卷から各々言語方面の興味に資したのであるらしい拔書——日本語を音寫せる漢字の右側には朱筆で片假名を附してある——が卷之一・二・三は二十九丁（目錄四丁共）、四・五は三十五丁の二部に分けてあるのであるが、是に由ると本文第一行の兮が尾になつてゐる以外には寧ろ珍書同好會本よりも資料價值は下る様に思はれ、第二行が乞而木那となつてゐる（釋音の部も然り）のも目下の立場からは九州味が甚だ滅殺されて了ふので却て面白くない。只同じ第二行目あたりから朱筆の片假名が見られない點が難讀の興味を唆らないでもない様な氣を幾分起させる位のものである。

さて以上のものを我が假名に先づ書き替へるには此の本の卷之三にある「字書」の筆頭たる

以路法四十八字樣音註清濁變用

（珍書同好會本「乾」五六オ）

以下に示してある音の通用方法の外に、續いて記載してある數多の和歌——漢字と平假名とで並書され更に呼音、讀

法（讀法は漢字の右に一々片假名が附してある）、釋音、切意が記してある——や卷之四（同上本「坤」）の「天文」以下に例示してある多くの語例——此の中の一部を前項に於て扱つたのであるが——を示さなくては讀者の興味も納得も望めないものゝ、兎も角漢字は浙江邊の當時の音を示すのであるから、切意に於て強勢の助語たる兮（日本音ケイ）は本文では「い」に通用してゐる事などを承知して居ればよいのである。今釋音に由つて訂正された本文を左に同じ體裁で書替へると次の様になる。右側の黒點は釋音で訂正したものを、棒線は漢字一箇に該當するものたるを示す。

しゐのなかはなにこゐのなかくにひごも
 のりこんなよきちものきよいにしいけよか
 けいきよやまあをみづあすぶじやうずみるみ
 ごごいこころおもいむぞううみごゐかよもの
 のおんぢやろにほんうち

是を切意を参照して日本語として受取つて見れば

戀しやの中華に戀の中國 人物利根なよ 着ちる物淨い 西湖好か景 青山綠水
 遊ぶ上手 見る見事い 心想無慙 海遠い とものかよの おんぢやろ 日本中

とでもなるであらうが、更に人各々説はある筈だ。「利根」「上手」は春日説（私信）であり、「無慙」は私見——木は

「む」にも用ひてゐるのである——であるが、「海遠」以下は大事を取る限りどうも解し難い。「よの」「かよの」と云ふ結び方は他の山歌に頻出するから咏嘆の助語と解するのが最も穩當と思はれるが、「ともの」は何とす可きか、當然想像される誤記、誤寫を基とする此の種の按讀の馬鹿々々しさは今暫く忘れる事にして幾分の稚氣を許容されるものとすれば、此の儘何とか讀み下さうとする限り、海遠いけれども云々と軽く逃げられないとすると、自分は木を矢張り「む」に讀んで「止むのか〇〇」、更に本文通り路を採つて「る」に讀み「止むるか〇〇」とは出来ないものと考へるが、「〇〇」の「よの」は又様々に受取られ、是を分解して次の句へ続け「無うおんぢやろ」とされたのは新村説（前掲論文）であり、「〇〇〇（意味不明）か（九州形容詞の語尾）世の」とも考へられるのが春日説である。「おんぢやろ」は勿論疑問的反語と解し即ち先づ在るまいと云ふ意味であらう。支那の國名や地名を日本流に讀む上に最後の文章法なども現代尙行はれる漢詩の朗詠方法を想へば決して笑へないが、「好か景」なる筑紫訛こそ時と場合とでは随分御愛嬌ではあつても恐らく何人にも否定出来ない當時の九州方言の誠に「好か例」ではあるまいか。

南蠻文學に於ける九州方言の粒塊を篩ひ出さうとするに當つては先づ諸家が漠然と使用する「西國訛」「西陲の語」「九州の土音」など云ふ概念の檢討を一互り行ふ必要のあるのは勿論ながら、一は自らの拙い饒舌を恐れる爲に、一は問題を却て簡單明瞭にする爲に、聊か仰山には見えるが又と無い此の機會を利用して、わざと諸家の記録を其の儘拜借して論旨を進める形式を取つて自ら識者の了解に訴へる事にしよう。

アーニスト メイスン サトウ（薩道）が彼の「日本耶穌會刊行書志、一五九一—一六一〇」（英文）を明治廿一年に出したが（村上直次郎、新村出、石田幹之助、吉野作造の諸氏の邦文解説を附して日本で複製刊行された、警醒社、

大正十五年) 其の翌年(一八八九)の「日本亞細亞協會會報」(英文)第十七卷第一部に於てバズル ホール チエ
ンバリン(王堂)が是を論評して居る中に薩道書志第一なる一五九一(天正十九年)の「謔聖徒の御作業の内拔書」
の一部分を例示した後で(九四頁)

吾人は西班牙語及び葡萄牙語風の子音用法と長崎方言の特質とを差引けば、日本語の發音は過去三百年間實質的
には變化しなかつた證據を上記の音譯に於て有する

として居り、次に同書志第六なる一五九六(慶長元年)の羅馬字本「コンテンプトゥス・ムンデー」(厭世經)——有
名なる「イミターチオー・クリースチー」(基督模倣)の和譯——の紹介の後で(九五頁)

小冊子の標題 *Contemptus mundi jeshu* は薩道氏には難題であつたに違ひない。併しながら、長崎音の知識に加
へられたる小許の考慮は神秘なる語 *jeshu* は「一卷に完成されたる」を意味する *zenbu* (全部) に外ならぬ事を
彼に示した

とあるのが抑々九州方言肯定説の皮切とも目す可きか否かは自分の知る限りでは無い上に、更に以後如何程迄斯かる
記述が活字になつて存する哉は益々不案内であるが、吾人目下の目的は近來頗る水準の高上した日本の(音聲學と方
言學とを經緯とする)國語學、即ち日本言語學の立場から偶然南蠻文獻學の地方的言語要素を云々しようとするので
あるから、九州方言問題に關する限り、たとへゲイオルク シュールハメルが「第十六・七世紀日本耶穌會士傳道
に於ける教會言語問題」(獨文、東京市麴町區平河町五丁目十八番地、東亞自然科學及民族學獨逸協會、一九二八)の
様なものを全く敬遠して了つても、日本の國語學徒の業績だけで立派に解決のつく可きものと考へられるのである。

村岡典嗣博士が「吉利支丹文學抄」(大正十五年)の「序説」で言はれる如く(六八頁)

なほ長崎地方の方言的要素の存すべきことは、Satow 氏が書志の刊行當時、すでに Chamberlain 氏の注意したところであり、多少の眞理は存すべきも、少くとも本書に収録したやうな文章體のものに於いては、この事は比較的考慮に入るゝ必要はないかと思ふ。大體吉利支丹文學の文章は、當時の様子の一つで、或は用語讀辭などに今日九州地方に残り傳へられたものと一致したるものがあつても、それを直ちに當時の方言的要素と見ることは速断である。この問題は少くも一々の場合について慎重なる考慮を要する

のであるが、吾人はその眞に學術的研究の稱呼に適はしい事山田孝雄博士の「國語史料 鎌倉時代之部 平家物語につきての研究」と正に好一對と見做さるゝ可き橋本進吉博士が「文祿元年 天享版 吉利支丹教義の研究」(東洋文庫論叢第九、昭和三年一月)の最後の項たる「用語について」の所説を直に借用して論證の進捗を計る事にする。先づ音聲に關しては(六六頁)

此の書は果して何處の言語で書いたものかといふ(中略)問題は此の書の言語全般に關するものであつて、特に音聲にのみ關するものでないから、纔に音聲に就いての研究を畢つたばかりで之を論ずるのは不適當なやうであるけれども、本書のやうな文語に於ては語彙又は語法の方面に於ける地方的差異は絶無でないまでも極めて僅少であつて(下略)

殆ど問題とならない事は後で一々作品として扱はる可き口語資料の時とは自ら趣が異なるのであるが、さて然らば(六七頁)

此の書の用語がどの地方の音によつたものであるかに就いては、此の書の中には何の記載も無い。それ故これを

決めるには、此の書の用語中にあらはれた音韻現象を根據とし、その音聲上の特徴が何處の言語に一致するかを觀て推定を下すより外に、方法が無いのである。とは云へこれは甚困難な事業であつて、當時の文化の中心であつた京都地方の言語の音韻狀態さへ、まだ不明な點が少くなく、まして當時の諸方言の音聲上の特徴の如きは、多くは暗黒の中にあるのであるから、十分確實な結果を得る事は到底豫期し難い

としても、音聲上の特徴を現今の方言と對比して見ると(六九頁)

此の書の用語は概して九州方言に一致する所が多い。併しながらこれは現今の諸方言との比較によつたもので、此の書の出來た時代、即、今より凡そ三百年以前に溯れば、此等の特徴は、音に九州方言のみならず、他の地方の言語にもあつたやうであつて(中略)かやうに考へ來れば、この書の言語は、單に九州地方のみならず、近畿地方にも行はれた標準的發音によつたものと觀るべきである。

これまで耶蘇會士の刊行した諸書の用語については、とかく九州地方の方言によつたものと觀られがちであつた。いかにも、當時葡萄牙の商人や宣教師が渡來したのは主として、九州地方であつて、基督教の布教は、京畿地方にまでも及んだけれども、その根據地は、やはり九州であつたのであるし、耶蘇會士編著の諸書は、後には京都の刊行もあるけれども、大抵、加津佐、天草、長崎など西陲の地で出版せられたのであるから、その用語は、九州地方の方言により、その方言を混じて居ると考へられるのも一應尤である。しかしながら、此等の書がはじめて出版せられた文祿の頃は、基督教初渡以來四十年以上の歲月を経てゐるのであつて、教父等の我が國語に關する知識もかなり深く(中略、以下七二頁)各地の方言の相違については、必相當の知識を有してゐたに違ひない(中略)。されば、そ

の編著になつた諸書には、文語は勿論、口語に於ても一地方に局したものを避けて、なるべく廣く通ずる雅正な言語を用ゐたであらうと思はれる。

それでは、その雅正な言語といふのは、何處の言語であるかといふに、それは、いふまでもなく王城の存する京の言語である。それでは、この書に用ゐられた言語の發音は、ことごとく當時の京の言語に據つたかといふに必しもさうでない(略)

のであつて、それは當時の京都では既にジ・ヂ及びズ・ヅの混同が始つてゐるのに此の書では嚴重に區別されて居るのである。(七三頁)

(上)されば、本書の用語の發音は、全體として見れば、或地方に實際存するものをそのまま寫したのでなく、大體京の發音に據りながら、或部分は他の方言に於ける發音又は昔からの假名遣によつて修正を加へた、模範的又は標準的のものである。もし、その當時日本の標準語といふべきものがあつたとすれば、本書の羅馬字綴りは、正にその發音を示してゐるものといふべきである。

要するに、本書に用ゐられた言語の音は、決して九州地方の方言ではなく、主として、京都地方の言語に基づいた標準的發音であつたとおもはれる。

次に語法に就いては(七四頁)

此の書の文は、當時の俗文である。其の語法は、中古語の語法が後世の口語の影響を受けて變化したもので、中古の文とも同じからず、當時の口語とも相違がある。しかしながら、口語の語法との差異は、現今の口語に比

して少かつた事はいふまでもない。當時の口語は、今日の口語に比して中古語に似た點が多かつたからである。されば此の書の文の語法の研究は、これと同時代に天草で出版せられた口譯平家物語や、伊曾保物語の翻譯のやうな、口語で書いたものとは違つて、國語の語法の歴史を明にし、その發達變遷を究めるには、さほど多くの寄與をなすものではないけれども、當時行はれた俗文の語法を知り、日本の文語の發達を研究するには、必しも其の要なしとは云はれないのである。

が、是は差當り目下の吾人には無關係と見做して、さて語彙は如何と見るに、吉利支丹關係の外來語を當時の日本語に於ける九州方言の特異性とでもして列擧しない限り乃ち（九三頁）

（上略）特殊のものゝ外は、世間普通に行はれた俗語であつたと考へられるのであつて、局部的方言文學の對象とはならない筈である。

文語と口語との中間に立つ所謂俗文、少くとも是に類し是に近き吉利支丹文學に於ける九州方言の影は、少くとも當時の日本語圈内では殆ど抽出し難い事、今後の研究の結果は知らず、恐らく他の凡ての作品を通じて右の如くであらうと思ふが、然らば同じ文學の口語資料に於ては如何であらうか。是にも文語味を帯びるものと純口語文との間に又種々の段階の存する事に由つて一々作品を精細に觀察する必要あるは言ふまでもないのであるが、幸にも當時の南蠻文獻廿數種に關しては、元來が宗教用書に供された文語資料に比して國語學習用書たる口語資料の方は極めて數が少く、又その性質上からしても當然なのであるが大部分は既に専門家の言語研究が一通り済んでゐるから、今便宜上時代順に資料を全部羅列して、諸家が九州方言要素有無に關して發表された意見を清算して見る事にする。

文祿三年（一五九四）天草版「アルヴァレス式拉丁文典」三卷（羅馬、アンヂェリカ文庫所藏）の中に僅か斷片的に引用されてある古逸南蠻文學「客物語」と「死神物語」とは新潮社「日本文學講座」第十九卷（昭和三年八月）（改訂新版第十五卷）で新村博士の「南蠻文學概観」（「琅玕記」所收、昭和五年）に於て指摘採録されてゐるが、是は彼のルドリギシの慶長九年（一六〇四）長崎版「日本語典」——前項に紹介した——に於て引用されてゐる十數種の古逸物語、即ち是亦新村博士が雑誌「藝文」第拾參年第二號（大正十一年二月）で「吉利支丹文學斷片」（「南蠻更紗」所收、大正十三年初版）として、又土井忠生氏の指示に由るとかでその補遺を同じく雑誌「書物展望」（東京市外代々木富ヶ谷一四九三、ブツクドム社）内「書物展望社」第一卷第一號（昭和六年七月號）に於て「古逸吉利支丹小説の片影」として精細忠實に紹介翻譯されたものゝ中の同名作品と全く同じなる事は比較して見れば分るのであつて、只「客物語」中の一語「御がいきやう」などは無論「御在京」の誤寫なる可き事——洋字相似の爲か——は容易に想像されるから問題にならないのであるが、茲に此の十數種の古逸資料の斷片の中に吾人の注意を惹く言語事實が存するのである。それは前項屢々指摘した春日政治教授がバンフレトや「日本文學講座」第十八卷（昭和三年七月）（同改訂新版第一卷）の論文でも扱はれてゐるが（四一頁）、特に雑誌「國語國文の研究」第二十七號（昭和三年十二月）に於て詳細に論じてゐられる。一は「豊後物語」の一句であつて此の長崎版日本文典一五三丁裏にある

大友様の御内心を語らせられたで、なほ明かに思出しませた。

而して今一つは「加津佐物語」の一句であつて同文典一二二丁裏にある

一切舟が延びぬやうに思ひませた。

と云ふ何れも同一の語法である。即ち元來給與を表はす敬讓動詞「參らす」から發達した下二段助動詞「まらす」は、當時内地一般では既に佐行變格に轉化して了つて居たのに、九州では未だ比較的的古形を存する所が殘つて居り從つて連用形に於て他の文例の様に「まらした」と云ふ形を採らない點が、「岩波講座、日本文學」の「南蠻文學」(昭和六年六月)で所謂(四〇頁)

(略)上
土語に富んでゐる

と云ふ論斷の實例——示されてない——と偶然一致するか如何かは敢へて此處に問はないとしても、謂ひ得可くんば當時の九州方言の特異性の一つとはならないものかと云ふ事になるのであるが、換言すれば、九州の地に於て三百有餘年の昔に發生し創作され而も全く散佚湮滅して辛うじて面影のみを今日傳ふる是等可憐な筑紫文學の衣裳は僅か此の二句を、只此の一語法を除いては、古代と同じく現代と等しく、腐蝕性の猛烈な中央の標準語に全部浸透されてゐるのであつたと論決し得るのである。

文祿元年(一五九二)天草版「口譯平家物語」四卷は新村博士が夙に「史學雜誌」第貳拾編第九號及十號(明治四十二年九月及十月)に於て紹介され、此の論文は「南蠻記」及「南蠻廣記」(大正十四年)に收められて居るが、此の口語文學の著者問題は暫く措いても、本文の翻字は數年後同博士の手により御在英當時の拔書——全體に互り極めて僅少の分量——を「南蠻本平家物語抄」(大正三年十二月)(上掲「二單行本所收」として發表された儘十數年を経た所、雜誌「藝文」第拾七年第參號(大正十五年三月)から第拾八年第參號(昭和二年三月)へ掛けて毎號十二回に亙つて龜井高孝氏が東洋文庫のロートグラフ本から此の右馬之允と喜一檢校との對話四百六頁の翻寫——新村博士補筆——

を全部完成された。是は單行本に纏めて「天草本平家物語」(昭和二年六月)とされたが、此の努力とは獨立に並行前後して長沼賢海氏は第四卷を除く三卷分全部を翻譯されて「南蠻文集」(昭和四年十月)の卷頭に編入された。

さて龜井氏の翻譯は其の單行本の「凡例」にも斷つてある通り(二頁)

(略上) 國語學上の資料としてよりも、讀物として提供せん事を志ししを以て、原文における嚴密なる音韻上の區別は一々これを表現しえざりし場合なきにあらず

とし、従つて原本の葡萄牙風の羅馬字の例へば「xe」は皆「せ」と寫してあるが、併し(三頁)

(略上) 固有名詞等にして地方的に異りと覺しきもの、その他紛れ易きものに對しては原音を傳へんがために、片假名を用ゐて發音を示せり

として、例へば「母」^{ハツ}「福原」^{ユクワラ}「一日」^{ヒトシ}「三四年」^{ミツシゴト}等とされて居り、「卷尾に」を見ても(一—二頁)

(略上) 原本成立の當時即ち文祿慶長の頃わが國における國語、口語の語法、用事、假名遣、乃至は本書の編まれた九州邊の當時の方言など、調べられるだけは調べて、單に國字に翻譯のみでなしに能ふならば三百年のそのかみの香を彷彿させたく(略下)

殆ど直接資料として使用出来ると思はれる用意の下に發表されたのであるから、専ら此の單行本に由つて湯澤幸吉郎氏が雜誌「教育」(茗溪會)第五百三十九號(昭和三年一月五日、冬期臨時増刊)に於ける論文「天草本平家物語の語法」の如き眞摯な研究のあるのは當然であつて、湯澤氏は此の論文の總括として(七〇頁)

抄者ハビアンの如何なる人物なるか、詳細には知らぬが原書は天草學林の印行たるの故を以て、語法の上にも、

主として京都邊の僧の手に成つた抄物に現れるものとの間に、著しい差異の存するなきやを疑い、またそうあるべきを豫想して進行したのであるが、この期待は見事に裏切られて、既に隨處に述べた通り多少の差を見せるだけで、地方的な特殊な言方とも云うべきものは、ほとんど無いと概言し得る。もつとも單語の發音には、剛(剛)の者、大剛、心も剛に等)をカウ、強盜をガウダウ、三四(三四人、三四年等)をサウシと讀ませ、代名詞の和殿をワトノ、副詞「なまじひに」の「じ」を清音に發音する等、我等の注意を呼び起すものがすこぶる多い様で、これは一括して研究する要あるを認める

と結ばれてゐるが、同年同月僅か數日遅れて「吉利支丹教義の研究」が發行されたのを想ひ出しさへすれば最早「南蠻文集」の「解題」(に賞)で盛に跳梁する九州方言の概念の内包外延を一々考慮するのは自他共に少からず迷惑であるけれども、「本書に多く見ゆる(中)方言」(三〇頁)が若しも原書の誤記、誤植と考へられる以外のものを意味してゐるなら、ハビアン問題とは全く無關係に、問題は餘りに明白なのである。

文祿二年(一五九三)天草學林で刊行された「伊曾保物語」は新村博士に由つて雜誌「太陽」第十六卷第五號(明治四十三年四月)で「西洋文學翻譯の嚆矢」(「南蠻記」「南蠻廣記」所收)と呼ばれると同時に同じ人の手に依り雜誌「藝文」第壹年第壹號(明治四十三年四月)から第九號(同年十二月)へ亙つて毎號連載された翻字が單行本「文祿譯伊曾保物語」(明治四十四年)となり而も絶版久しかつたが昭和三年十月には新裝を以て刊行されてゐる。只その「新增附録」に由れば(一二〇—一頁)夙に少くとも明治二年に喩言の第一なる狼と羊の話が翻寫された事が分り、更に(一一八—九頁)此の口譯は拉丁原典の直接翻譯か或は既存の文語譯本に基づくかは兎も角、茲に「イソボ

が生涯の物語略「三十四頁」と「イソボが作物語の抜書」上廿五篇・下四十五篇五十九頁、合計九十三頁の翻字は完成されたが、その「解説」には（一三頁）

(略上) 間々定格に違ひたる發音及語あれども、それ等は却て時代の慣用若しくは訛言を知るのたつきとなれば本文及振假名に於て成るべく細かに之を保存せんことを期せり(略下)

とはあつても、「口譯平家物語」の翻字へ及ぼした手法たる、何故か、「xe」を皆「せ」と寫してゐる點などは、長沼氏の「南蠻文集」の翻字の方が（「解題」四四頁）

(略上) 本集に收めたものは短時間に、大急ぎで書寫したのであるから、一言半句の吟味を争ふやうな研究の材料とはならないかも知れない(略下)

にも不拘遙に原典の香を傳へる事より忠實なるを覺えしめ、此の文集第二卷の「天草版イソツブ傳」及び第三卷の「天草版イソツブ物語」は立派に存在の理由あるを確信するのであるが、さて此の伊曾保物語の言語研究には新村本を基として春日政治氏が「日本文學講座」中の前述べ々指摘した論文があり、是はその副題たる「文祿伊曾保を中心とした語法」と云ふ名前からしても先づ吾人の聽く可きものと信するのであつて、即ちその第十四卷（昭和三年一月）（改訂新版第一卷）で（七頁）

(略上) この用語は當時の純口語と見るべきである。しからば地方的に何處の言葉であるか。天草刊行のものは九州の方言であるかの疑もあり得ることではあるが、新村博士も已に言はれた如く、京都（當時西人の所謂ミヤコ）の言葉 中央語と見るべきである。書物に記さるべき口語が標準語を以てしようとする傾向は自然の事であるの

四種」(明治四十四年一月)、「南蠻記」「南蠻廣記」所收)で行はれた斷片的の翻譯字が僅かにあるのみで、全部を窺見する事は未だ出来ないのではあるが、是が爲に却て少くとも今日迄の所此の作品だけは吾人目下の問題の引合に出されず済んでゐるのである。

「口譯平家物語」と「文祿伊曾保物語」とそして「金句集」との三部が合綴されて英京の大英博物館の奇觀書の一であり、ロートグラフ本以外には見るを得ない様な事は今更此處などで書く必要はないのであるが、兎も角此の三部合綴本の扉紙に所謂「日本のことば」として同じ紙の裏側に於て所謂「言葉稽古」とには葦爾たる筑紫の土語は極力排斥した筈だ。動詞の二段活用を嚴重に守る點が乃ち京風でないとしても云ふ論陣を張らない限り、ア・ク・セ・ン・トの相違は今日の標準語使用者も文字の上では區別差等を設けないのが普通ではないか。

寛永九年(一六三二)羅馬でドミンゴ派の西班牙宣教士コリャゾに由つて刊行された拉丁文對譯の所謂「懺悔録」は逸早く前記の「吉利支丹版四種」に於て同じく新村重山ぢゅうざん先生が抄出されたが、是は(「南蠻記」三四七頁、「南蠻廣記」二六三頁)

(上)口語史料としては屈竟である。(中)師徒兩人の問答は宛然吾人が狂言で聞く所の言語で、又天草吉利支丹版の平家物語中の琵琶法師き一と主人右馬允との對話その儘であり、同時に文祿舊譯の伊曾保物語の言葉とも同式で、更に一層疎末な文句がある所に却て興味を覚えしめるのである。本書の價値も亦此點に存する

のであつて、時勢は遂に吉野作造博士及松崎實氏兩人の手に依り全文六十六頁中の和文は只その第六誠の部分の削除を以て全部東大本から翻譯され、是は註釋を附して雜誌「改造」第十卷第二號及第三號(昭和三年二月號及三月號)

へ掲載されたが、他方昭和四年秋に發表された「南蠻文集」にも略々同様な努力が見られ、更に翌年は姉崎正治博士が「切支丹迫害史中の人物事蹟」(昭和五年十二月)の中へ「キリシタンの懺悔告白」として吉野・松崎兩氏の跡を追つて同じく東大本を全部翻字されたが、是は前記數氏の瀕踏はあるし削除の部分へは對譯の拉丁文を挿入すると云ふ様な用意をされてゐるから是等數種の試の中では最も學術的の香高きものであり、従つて口語資料本文の右側に番號を附しながら其の註釋を少しも書き加へなかつた辯明さへも無い長沼氏の「南蠻文集」第九卷「懺悔録」の翻字——而も和文に脱落多き一八六六刊行の再版本(巴里、東洋語學校本)に由る——を評して(五四八頁)

(上) 隨分奇妙な試みであり、新村君始めの研究を無視して、而かも誤謬、脱落等缺點の多いもので、殆ど問題に
ならぬ

とされるのも無理はないが、併し獨り本篇のみならず「御穿鑿」^{ごせんさく}「傾城」^{けいじょう}等の如く一々左行拗音を寫されてゐる點などは長沼本の方が姉崎本よりも原典に忠實ではないかと思ふ。

さて此の「懺悔録」の著作者と材料とに關しては少し諸家の意見を聽く必要があるのであるが、吉野博士は「改造」二月號で(八八頁)

(上) 編纂者はコリヤドとなつてゐるが、記録者は必ずしもコリヤドとは斷じ難い。出版は寛永九年だが、少くとも寛永年間に書かれたものでない事
(下) 略

を主張され、而かも此の西班牙人の日本渡來は元和五年(一六一九)であるが(同頁)

(上) 其以前から寫本のまゝ、新來宣教師の用に供されてゐたのを、後年コリヤドが蒐めて編纂したものに違ひない。
(略)

みならず、彼等耶蘇會士は皆一度中央に出た人々であり、ことに平家物語の編纂に携はつた邦人フアビアン（も
と越前の禪僧惠俊）は新村博士の言はれるやうに、たとひ北陸の産にしても、壯年時代十年を京阪の布教に従事
した人であるから、立派な標準語の話し手であつたことは勿論である。しからば平家物語の標準（語）で書かれてゐ
ることは勿論、伊曾保も亦多分フアビアンの手に成つたものらしいと言はれてゐるし、よし編者を不明としても、
其の用語は全く平家物語と同じ調子を保つてゐる以上、亦同様に斷言して差支ないものである（略）
と知つたら、「日本文學」の「南蠻文學」で所謂（四一頁）

（上）この口語體には地方色の豊かな方言を存して（下）

ゐて、然り而して其の「方言に富んだ」（四二頁二行）實例が萬一「狼」や「母」——何れも寧ろ京都方言である——
でもあつたら、而も此の方言が暗々裡にでも筑紫の天地を指してゐるのであつたら誠に「校正畏る可し」の金言に
我人共今更の如く驚くに違ひない。従つて「南蠻文集」に於て（「解題」一九頁）

（上）平家に比べると、口語的な調子が多いから、何となく時代めいた所が多くて面白い（下）
のは間違はないが、併しその爲に（同頁）

（上）平家よりは九州地方の土語がより多い（下）
と云ふ事には決してならないのである事は自分の暇々する必要も最早あるまいと思ふ。

文祿二年（一五九三）天草學林で即ち伊曾保物語と同年同處で刊行された「金句集」全約四十六頁の中に見える文
語文の後へ一々註釋として記されてゐる口語文は矢張り當代の標準語であつて、其の面影は新村博士の「吉利支丹版

果して然らば實際の記録者は誰人なるか。そはなほ今後の考證に待つ。

とされ、姉崎博士は前掲の著で（一四五頁）

(略) 彼は長崎邊を主として働き、足は一步も九州以外へ出なかつた(略)

上に（二八七頁）

|| (略) 此の(中)懺悔録は他人の材料を我者顔に出版したもの(略)

であり（五四三頁）

(略) コリヤドが自ら著作者と名乗る権利のないことは殆ど明白で、そのラテン譯は彼れの作だとしても、懺悔録そのものは、コリヤドの集めたものであり得ない證據が十分ある。(略) 懺悔告白の言語にも、内容事實にも上方

京阪の材料が少くない。九州のみ、特に島原地方を主として、三年間働いたコリヤドが自ら接した告白でない事は、此だけでも明白で、少くともその大部分は他人から得た材料であるに違ひない(略)

とされ、その告白の中には（五四四頁）

(略) 自らできいたものとは考へられない。(略) ドミニコ會教師の得た材料だとは考へられない(略)

が、中には併し（同頁）

(略) 長崎方面にゐたコリヤドの親ら接したものだといふことはあり得る

とし、更に彼が日本滞在の短期間（三年）と日本語習得の程度とを論じて（五四七頁）

(略) 此の告白集は、右の諸點を總合して見れば、どうしても慶長の前半又は後半、上方に於ける材料と元和年間

九州に於ける材料とを含むて、恐らくゼスス會の教師等の中で出來たものであらう。(下)略
と論結されてゐる。

次に此の告白集の文體に於ける方言問題如何と見るに、吉野博士が(二月號八八頁)

(上)略 言葉遣ひは外人の日本語たるを失はず、中には歐文の直譯體のやうな云ひ廻しも二三箇所あり、其上多く長崎地方の方言が使つてあらうから、當時の日本語としても相當割引して考へねばならぬが、それにしても、慶長年代の純然たる口語を傳へたものとしては恐らくこれが唯一無二のものであらう。天草本平家物語にしても伊會保物語にしても、當時の口語には違ひないが、特に文章として書いたもので、従つて文語化した口語に外ならぬがこれは、述べた言葉を其儘聞き覺えに書き録したもので、なんら意識的な推敲修飾がない。この意味で、國語研究上の資料としても本記録は逸し難いものである。(下)略

とされて居るのは御専門上から考へて随分穩當な方とせねばなるまいが、茲に一寸困るのは新村説の發展であつて即ち「南蠻文學概觀」に於て何故か(「日本文學講座」第十九卷十一頁、「琅玕記」六五六頁)

(上)略 西邊の訛りらしいものも交り(下)略

と釣り出された餘勢が遂に「日本文學」の「南蠻文學」で(一一一頁)

(上)略 九州方言をもまじへて(下)略

となつたらしいとすると、此の方面の素人なる長沼教授が「南蠻文集」で(「解題」五六頁)

(上)略 九州地方の土語もなか／＼多い。一寸讀んだところ、豊後邊の方言が多いやうである(下)略

と書かれたのなどを一々云々するのは餘り揚足取で却て感心されないであらうが、どうも是等吉野、新村、長沼三氏の所謂九州方言なるものは、當時の日本語を充分認識把握して居られないと評されても、何か積極的に具體的な實例を示されない以上仕方があるまいと考へる。「文祿元年
天草版 吉支丹教義」が國字本と校勘して如何に誤植、否認記が多いかを想へば、此の告白集などが何か破格らしく思はせる言語上の人間的不可避物を多量に含有してゐるのは餘りに見え透いてゐる。そして其れを九州方言と呼ぶ論理は如何にしても許容し難い。單なるお座なりとして以上には受取られないと思ふ。

此の告白集に否定過去助動詞「なんだ」と云ふ語法が出て來るのは「口譯平家物語」や「文祿伊曾保物語」と同様であるが、東條操氏も指摘される如く（私信）是許りは恐らく當時に於ても矢張り近畿方言の特異性の一と見らる可き「さかい」（「境」まかひ）と云ふ語源説を全く肯定してよいか否かは別として）と云ふ理由を示す助詞が、自分の調査によれば「第一誠に關する告白」「三番のマンダミエントに就て」及「慈悲の所作に對して」の部分の中に各一回宛、少くとも都合三回存するのであつて、是等の文例を此の順序に従つて左に摘出する事とし、便宜上各翻字本に於ける場所を附記する事としよう。

(上) その儘上へ罷り上られてござるさかいらに (下) 略

南蠻記三四四頁十二行、南蠻廣記二六〇頁十二行、南蠻文學廿三頁十二行

改造二月號九五頁上欄廿一行、長沼本十六頁七行、姉崎本五五八頁十六行

(上) 差し延ぶる事も得いで 仕つたさかいらに (下) 略

改造三月號四七頁下欄五行、長沼本廿六頁六行、姉崎本五六五頁二行

(上)神佛かみぶつにかけて斯う致すまいと誓文立てと云ひつけられたさかいに(下)略

改造三月號五五頁上欄十四行、長沼本五二頁六行、姉崎本五七九頁六行

右の如き上方の材料があるからと言つて「懺悔録」に九州方言の片影無しとは勿論云へないのであるが、若し其れが(上)それにつき御死去なされたところ(下)略

改造二月號九二頁上欄二行、長沼本八頁五行、姉崎本五五三頁十七行

位の例證——是は無理であらう——であるなら、吾人は却て、前項に於て明言した通り、標準語の方處的差異を超越する普遍性に益々驚くのみだ。現代に即して想像して見ても、當時の九州方言の特徴や區劃が仲々概括的に論決出來ないであつたらう事は勿論首肯されるが故に、吾人は「懺悔録」の九州方言要素として決して形容詞語尾「か」などを漫りに求む可きでない代りに、澤山見出される動詞二段活用を其れだけでは「日本風土記」に於て少く共積極的には筑紫言葉として擧示出來なかつた理由は吳々も味はなければならぬのである。若し夫れ敬語助動詞「まらする」の如き、是は彼の當時の日本語資料として貴重なる朝鮮の康遇聖の「捷解新語」(康熙十五年即ち一六七六刊行、但し原稿は是より五十餘年前のもの、小倉進平博士の「朝鮮語學史」に詳しい)に記録されてある「マルスル」を提唱して當時の九州方言特異性の一と出來ないのと軌を同じくするのであつて、此の助動詞は安田喜代門氏きよしろんが「國學院雜誌」第三十七卷第八號(昭和六年八月)の論文で指摘されてある「今昔操年代記」(享保十二年、一七二七春、大阪正本屋刊)下之卷の「豊竹島太夫」の條下にある

東西くちくとんばいほめまらしよ。

博文館「帝國文庫」第九編（昭和三年）「近松世話淨瑠璃集」六五八頁

などこそ、自分目下の立場からは、當時の九州語也と假に誰かに引用されても、年代上其の論法は無下に斥けられな
いかも知れないが、「懺悔録」などに於ては立派な中央語なる事は今更此處で繰返す必要はあるまいと思ふ。其の他
の音聲、語彙に關しても同様である。

同じ此の西班牙僧が同じく自身の著と潜稱して——姉崎博士に由る——同年同處で刊行した「日本文典」（拉丁文）
中の引用和文や「拉和辭典」の日本語が當時の九州方言と認められ難いであらう事は最早贅言を要すまいが、慶長八
年（一六〇三）及び翌年（「補遺」）長崎で耶穌會から出版された「日葡辭書」（ポドレイ文庫、大英博物館、巴里國
民文庫所藏）などこそ兎も角當時の九州方言が明白に識別指示されてあるから、彼の著者未決の「俚言集覽」廿六卷（
明治卅三年刊）などと同じ意味で「九州方言の記録」としては竝べて置けるであらうが、前に擧げて置いた「アルツ
アレズ式拉丁語典」に傳はる日本語などは其の翌年（文祿四年、一五九五）同じ天草學林で刊行された彼の「拉葡日
對譯辭書」（ポドレイ文庫、佛蘭西學士院文庫、和蘭ライデン大學所藏）のものと共に、今日と少しも變らず筑紫の住
民の上層に勢を振つてゐた當時の標準語に外ならないのであつて、誤記、誤植等のある點は何と言つても弱味には違
ひないが吾人は決してお座なりの九州方言熱に浮かされる必要は毫もないのであり、精々湯澤幸吉郎氏の「室町時代
の言語研究」（昭和四年十二月）の「序」に於て「吉利支丹教義の研究」の著者が（三頁）

（上略）九州地方を根據とした基督教徒の手になつたものである故に、その言語は必ずしも九州方言ではないけれど

も、いくらか九州方言に引かれた點がなかつたかの疑を容れる餘地があり(下略)と幾分の緩みを與へられる以上の南蠻文學全盛期資料九州方言混入説は如何考へても危険ではないかと思はれるのである。

吉利支丹口語文學として此の外吾人の忘れられない

奉教人の死(大正七年八月「三田文學」所載)(新潮社「芥川龍之介集」、岩波書店「芥川龍之介全集」第一卷、

改造社「現代日本文學全集」第三十篇、春陽堂「明治大正文學全集」第四十五卷所收)

きりしとほろ上人傳(大正八年三月「新小説」所載)(岩波版第二卷なる外は同右)

じゆりあの・吉助(大正八年九月「新小説」所載)(岩波版第二卷のみに所收)

の三つは、たとへ「まらする」が見當らないとしても、固より言葉の上からだけでも、村田春海が「つぐし志船物語」(文化十一年刊)の下位などに置く可き作品ではなからうが、もう是から「りじえんだ・あるじんちな」でも作らうとする人々には餘程巧みに當時の言葉を使ひ分けて貰はなければならぬのである。

吉利支丹文學と九州方言との關係に就いて最後に記録して置かなければならないのは浦川和三郎氏と長沼賢海氏との努力である。浦川和三郎氏は「日本に於ける公教會の復活」の上編(のみ)出版、大正四年、絶版)を出され、此の書の

「附録」中に僅少なながら吾人の眞に求める資料があるのであるが、是は該書の再版本とも見らる可き同氏の「切支丹の復活」(東京市牛込區若宮町廿七番地、日本カトリック刊行會)の後編(昭和三年十月)に於て其の儘見る事が出来るのである。今其の記憶す可き地名を此處に補ひ記して更に諸家の關係文獻を附記すると

長崎縣北松浦郡生月島傳來の祈禱文、是はダ、イヤス（連禱の九州土音）を記録したものであつて此の訛は「京都帝國大學文學部考古學研究報告、第七冊、吉利支丹遺物の研究」（大正十一—十二年、再刷は刀江書院、同十五年）に於て新村博士が「攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹遺物」（南蠻廣記所收）の中で（四四頁、「南蠻廣記」三七五頁）指摘されて居り、其の最初の文句は早稻田大學文學部文學思想研究會の「文學思想研究」（新潮社）第一卷（大正十四年五月）で西村眞次教授が「日本に於ける羅馬加特力教徒の執拗なる信仰傳承」の中で（二四六頁）引用されてゐる。長崎縣西彼杵郡浦上村及び北海（同郡の太平洋に面する地方の總稱、大村灣に面する内海に對す）傳來の祈禱文、是は前記の考古學研究報告に於て同じ論文で（一八頁、「南蠻廣記」四六〇頁）注意されて居る。

長崎縣北松浦郡九島の祈禱文、是も呂宋を「ドソン」と訛る程度にせよ今の場合見逃がせない（「切支丹の復活」八五六頁）。

熊本縣天草郡雷津村宇崎津の祈禱文、「ダ」行と「ラ」行との混同甚だしい事を浦川氏も述べて居られる（「同上」九〇六頁）。

長沼賢海教授も「日本宗教史の研究」（昭和三年十一月）に於て矢張り長崎人士の所謂離れ切支丹、天草土人の所謂古切支丹 即ち明治維新後の加特拉教會に入會しない天主教徒の研究を集大成發表されてゐるのであるが、即ち「十天草のはなれ切支丹の研究」では

熊本縣天草郡高濱村の唱言（同第一章第五節）

同 同 大江村の唱言（同第一章第六節、第三章第一節）

同 同 富津村字崎津(昔は今富・崎津に分れてゐたが今は合併して富津村となる)(第二章第五節、第三章第二節)、此の富津村のものは一部分は姉崎博士の「吉利支丹の迫害と潜伏」(大正十四年二月初版)の第七章にも採録してある。そして「十四 平戸島の離れ切支丹」の條下では

長崎縣北松浦郡獅子村字根獅子ねしこの呪文(四)

同 同 同 字獅子ししこの呪文(五)

の記録があり、その羅馬を「銅薄」、デウスを「れす」と訛る程度にせよ、新興の民族學的見地より見ても決して輕視す可き性質のものではなく、場所と時代とを考慮に入れて扱へば立派に九州方言の文學として成立し得るものと思はれる。「此項未完」(昭和六・九三〇)

前 號 補 正

○五〇頁三及四行 雜誌「史學」(三田史學會)第十卷第二號(昭和六年七月)で偶然松本信廣教授が「餘白錄」(一三〇頁)で「極東學院報告」(佛文、河内)第三十卷第一二號(一九三〇、一—六月)(一九三二刊)所載の論文を紹介されて居るが、馬來語最古の碑文は現代では少くとも紀元(前)七世紀末と云ふ事になる。我が國近時の南洋學勃興の折柄敢へて此處に記録する。

○五二頁十一行 括弧内の終りの 昭和五年六月號 は 昭和五年四、六月號 である。

○五七頁十三及四行、五八頁八及九行 此處で云ふ南方言とは狹義の、異端的と見做してもよいであらう所の鹿兒島言葉なるは勿論であつて、南方海上の熊毛郡の島々では例へば 申ますす(ます) と長音を保有し、即ち元來の形態

を残存してゐるのである。

○五九頁七行 「クルブク」(俯伏す) の語例は削除する。是は近畿方言にも故語として存するのであるからと、東條操氏の御注意があつた。従つて「國語の方言區劃」二七頁四行の同語例も同様の運命にある譯である。

○六一頁 殊に郡名は公稱と通稱との限界が區々である爲ルビには大に苦慮したのであるが、勿論此處では内地方言圏内のものは現代標準語としての發音を忠實に而も假名遣を顧慮して示したのであつて、ワを除く和行音の如き現代北九州大部分では阿行音に發音するのが普通であり南九州に於ても此の點を考へると 嚙^{そす} とす可きであつた。特に北九州方面の郡名に於て有聲音、無聲音の區別を混同記載せる書籍地圖の多いのに驚かされるが、此の點に關しては前號のルビと本號の此の補正とを参照して、權威ある地名辭典さへもその九州地方郡名振假名は宜しく訂正される可きである。

彼杵 郡名としては公稱は ソノキ と無聲音に、通稱及び村名としては ソノギ と有聲音に發音するから、あの表は 彼杵^{そのき} と訂正し度い。

筑紫 郡名及び村名共に公稱は チクシ と第一音節をイ列音に、通稱では ツクシ とウ列音に發音するから、あの表は 筑紫^{ちくし} と訂正し度い。

別府 勿論ルビは ベッぶ の心算であつた。

大島 方言意識を明瞭ならしめようとして故意に琉球音を以てして置いたのであるが、標準語的には勿論鹿兒

島本土では 大島^{オホシマ} である。

更に南九州では通稱、否俗稱として甚だしい土音轉訛が聞かれるが参考の爲に附記する。

八代 ヤッチロ。

出水 單獨では兎も角、無意識な發音や話中に於ては大抵 イツン と最後の音節が軟口蓋鼻音を以て終る。

日置、揖(前號の木屑は無論誤植)宿、肝屬 前條と同様な趣に於て ヒオツ イブスツ キモツツ の如く、最後の音節

は母音を略する上に内破音 (Implosive) 即ち所謂入聲音、更にはそれさへ略して發音する。

鹿兒島 同様な趣に於て、第三音節シを脱落して發音するが併し語感に留めて喉頭破障音となり カゴツマ

の如くなる。

以上の中、鹿兒島(市)方言の發音に關しては、原田芳起氏の觀察報告に負ふ所が少くない。

○六四頁九行 唐津町(昭和七年一月から市制施行)の所に於て・廓外を總なる五字分を削除する。因に此の所謂「城内言葉」

なるものは、小笠原忠知が正保二年(一六四五)に三河の吉田に移つて以來長恭が延享三年(一七四六)磐城の棚

倉に移る迄約一世紀間東北方言圏外に在つた(元祿十年、一六九七、長重、武藏岩槻に移る)事からも容易に想像され

るが、澁谷武夫氏の觀察報告に由れば元來東北方言要素は僅少であつて關東方言と見做す可く、使用者は今や二、

三百人而も地下の唐津辯の絶大なる影響を蒙つてゐると云ふ。是に對して延岡町(人口現在三萬超過)の「家中辯」は、内

藤政長が元和八年(一六二二)に磐城の平へ移つて以來一世紀四分の一の間其處を動いてゐないから、東北方言要

素が見られる譯だが、此の方は九州へ移つてから既に二世紀不足の歳月を閲してゐる事を忘れてはならないし、延

岡町役場の報告に由ればその使用者は主として中老以上の約四百五十人而も年々減少しつつあり一區劃に居住せず

元城下に所謂町辯に交つて點在して居ると云ふ。

○六五頁十五—七行 是等の語例は九州獨特のものとして云ふ意味では無い事は此處に改めて斷る迄もないのであるが、當時としても標準語の語彙には餘り出現しなかつたであらうと考へて摘出したのであつて、更には又殊に現代に於て九州の何處にでも見られると云ふ譯では勿論ないのであるけれども、當然想像される音聲、意義用法の些少の相違は兎に角、「またい」(鈍い、弱い)なる形容詞は土佐にはあつた筈であり(俚言集覽)、是と同系語と若しも目され得るならば「まてい」(町噺な)は東北地方、更には中部地方にも存するし、又「物類稱呼」に由れば中國地方には「まてな人」(律義なる人)があり畿内や東國の「またうど」(同上)と共に、語源は「全まき人」なる事が推せられ、「がいな」(酷ひたい、強い)と云ふ形容詞は出雲地方には存してゐて「強ぢな」から由來したと考へられる。「おろ」は否定の意を含有する丁度 little, wenig, peu に相當する語であつて故語には存し、現代標準語の「うろ覚え」などに現はれるものと同系語であらうが、是と最も結合が多く行はれる「おろよい」は「物類稱呼」に由れば備前にも存した筈であるとしても、該書が此の結合語を「わるい」と云ふ意に解してゐるのは少し當らないのであつて九州には現代でも「おろわるか」「おろきつか」さては「おろ煮えとる」の様な用法が見られるのである。

尙十七行括弧内の 調和 は 炊煮 と改める。

○六七頁八行 ふいたけんこつ は ふいたけいこつ と改める。因に九州では「何故」と云ふ語は「ナシ」と發音するのが普通であるから、當時としても なじかい は なしかい とある可きと考へちれ、是は従つて「物類稱呼」の同じ卷五の「なぜと云事」の條へも適用される。尙該書の卷一の人倫「ぬすひと」の條下には近衛龍山公

(前久、まきひさ天文五―歴長十七)が薩摩方言で詠まれた歌として

ぬすとで、おらぶにはたと たまかりて くわくさつからに せよくりそすや
が擧つてゐる。

○同頁九行 答得語 は 答る語 である。

○六九頁七―九行 井土周磐には此の外に論語の抄物があるが、是は「小學方言講義」よりも方言要素が少い。

○七一頁八行 東條操氏の「方言採集手帖」の再版は姉妹篇とも見られる「簡約方言手帖」(郷土研究社、昭和六年八月)に代へられたが、是には地方別の「方言書目抄」は省かれてあり、その代り同氏による

刊行方言書目「國語教育」第十六卷第九號「方言研究號」昭和六年九月)

刊行方言書目解題「方言」第一卷第一號、昭和六年九月から斷續連載)

に於て鳥瞰圖が得られる。

○七二頁三行 「日本風土記」の下の の 著者名 なる四字を削除する。

○同頁十三行 括弧上の や目録 なる三字を削除する。尚 Colindo の「日本文典」に九州方言の記述があると書いたのは全く失考であつたと東條教授は申越されて來た。

追記

○新村博士の「南蠻文學概観」(「日本文學講座」第十九卷)及び「南蠻文學」(二六頁)には「諸聖徒サントスの御作業」の文體は 口語體 とあるが、是は無論誤であつて 文語體 なる事は言ふ迄もない。

○雜誌「國語・國文」(京都帝國大學國文學會)創刊號(昭和六年十月)には新村博士が「吉利支丹文學殘闕」と題して長崎版「日葡辭書」引例和文中の所謂「物語」や俚諺を翻字掲載されてゐるが、其の口語は何れも矢張り下の吾人が珍重せざる性質のものである。

○前掲の長崎版日葡辭書中の方言——當時の所謂「國郷談」——資料は雜誌「方言」第一卷第二號(昭和六年十月)から數號へ斷續して近藤國臣氏が摘録記載されて居る。必讀の論文である。

○前掲の雜誌第三號(同十一月)には「筑紫方言」と題する轉載があるが、是は本誌(九大國文學)前號で(六九頁九—十行)所謂「長崎ことば」の事である。因に此の方言書に擧つてゐる(第三號)「おろい」なる語の解釋や語源は兎も角、少くとも結合語としての「おろよい」——現代九州では「おろよか」又は「おろい」の形が普通——は決して肯定的な「わるい」と云ふ意に譯す可きでないといふ自分は考へる。

○雜誌「宗教研究」新第八卷第四號(昭和六年七月)及第五號(同九月)で田北耕也氏が所謂舊切支丹の論文、「月刊日本文學」第一卷第六號(同十一月)で土井忠生氏が長崎版日本文典の論文は、直接關係はないが參考になる。

○長沼賢海教授が「南蠻文集」に見える(解題)「サルヴァートル・ムンデー」(救世主)なる羅甸語の誤譯は該書發刊當時、泉井久之助氏が逸早く指摘されたが(私信)、是を思ふと新村博士が「コンテムプトゥス・ムンデー」の説明を何度も(「南蠻更紗」三三頁)「南蠻文學」二九頁)されてゐるのを無用とは言へない譯だし、又彼の薩道や(「同書志」本亞細亞協會々報」第十卷第一九六一七頁)指摘してゐる例の表題 *Toguni gomuxemo nengi 1596* (時に御出世の年紀一五九六)の *Toguni* を想像上の日本の地名の屬格 (genitive) と解した歐人の逸話も決して笑へない。(昭和六・十一・廿)